

〔物類稱呼器用〕湯鐘やくはん 大坂及中國四國にてちやびんと云、遠江にてとうびんと云、信濃にてどりと云、土州の客予に語ていはく、我故郷土にやつくわんと云有ちやびんと云物

よりは少大きくして口短を云、ちやびんと云は、形丸らかにして、口長きを云とぞ、江戸にて其かたちいろく有といへども、すべてやくはんと云、又薬びんは其製別物なり、

〔倭訓栞也中編二十七〕やくわん 薬鐘の音なりといへり、湯鐘をいふなり、隠元やくわんなどいへり、遠州に湯瓶、信濃に手とりといふ、湯瓶は大草紙に見ゆ、

〔類聚名物考調度十四〕薬鐘 やくわん

この器はもと薬煮物なるを、今は茶を煎物として、薬をば俗に薬鍋といふ物有りて、その制異なり、ことに近年は隠元薬鐘といふ物出来たり、是は銅にて作り、口の長くさし出たる物なり、隠元禪師の此方へ歸化の時、もちて渡られしと云ひ傳へたり、古への制はいまだ詳ならず、

〔和漢三才圖會庖厨具三十一〕銅鐘 俗云薬鐘

本綱云、銅器盛飲食茶酒、經夜有毒、煎湯飲損人聲、

按今銅鐘専用之、煮物甚速熟、凡銅工作之、塗白目於内、令銅白色、以防銅氣、和錫鉛爲白目詳于金類、然新者有銅臭氣、數煮物經月者、不臭害亦無矣、

〔雍州府志七土產〕薬罐 以銅製之、今造諸品物、然元出自煎薬器、故總號薬罐屋、

〔本朝世事談綺器用二〕隠元薬罐

相傳ふ隠元禪師狀をこのみて作らしめ、常に爐におかれけると也、或説に、湯氣薬罐といふなり、鐘子の蓋をさりて、その跡へ薬罐を居て、茶の湯氣を以、上の素湯の沸事を工夫して、是を湯氣薬罐わんと名付と也、元薬罐は薬を煎する器なり、近世薬鍋出来て、薬罐は外にす、

〔成氏年中行事正月〕一同五日ノ夜御行始管領へ御出恒例也、中略 薬罐ナド參時ハ、右ノ手ニテハ